

文字もじ MOJI の世界

57. 阿 Q 正伝から 1Q84 へ

小林龍生*

大家さん：先日、村上春樹の『1Q84』を自炊していてね、カバーを眺めていたら、何だかへんな妄想が浮かんできて。

はたして、この Q は日本語なのだろうか、そうではないのだろうか、って。そうしたら、魯迅の『阿 Q 正伝』を思い浮かべて、頭グチャグチャ。

ご隠居さん：ありゃりゃ、今回は、大家さんかい、面倒な問題を持ち込むのは。

魯迅の『阿 Q 正伝』が発表されたのは、1921 年から 1922 年にかけてだから、このころすでにラテンアルファベットが日本語の中に混在していたことは間違いのないね。というか、幕末の開国以来、日本語と英語などのまじに横文字との混在は、本の執筆や出版の上で、まさに、頭の痛い問題だったからね。今でも、いろいろな意味で、スッキリしないことがたくさんあるよ。

はっつあん：そうなんですよ、ご隠居さん。この前も、横組ですけど、日本語本文と欧文との間のアキを、やれ四分にしろ六分にしろって、担当編集者とその上司がオイラの前で言い争いを始めて、あげくのはてに殴り合いになったりしてね。

ご隠居さん：この際、日本語の中での欧文、欧字の扱いを整理しておくかね。

はっつあん：おっ、早速、ご隠居さんの名講義モード。待ってました！

和欧混植には問題が多い

ラテン文字と和文の混ぜ組です。いわゆる和欧混植ですね。私が若い頃は縦組ではあまりラテン文字は使っていなかったと思うが、最近はラテン文字の縦組での使用は増加傾向にあるんじゃないかな。OECD や fMR のような頭字語、日本でも JASRAC という団体もある。今はやっているのは COVID-19 だし、Windows や Web は、昔だったら片仮名表記だったでしょう。ラテン文字が多く出てくる原稿の場合は横組を考えたものだが、今や縦組でも、けっこうラテン文字を使用している例は多い。

このラテン文字と和文文字とは、文字設計の考え方が基本的に異なっている。つまり、和文とラテン文字はデザインの面からみると異質な文字でもある。和文では全角の文字の外枠を基本としており、単語や文節など、ある程度のまとまりごとに読んでいくが、基本は 1 字 1 字で読んでいく。これに対し、ラテン文字は、プロポーションがあり、単語を単位に読んでいくので、単語としてもまとまりが大切で、単語内の文字間も和文よりも狭く、その字間は均等に見えるように設計されている。

それを組み合わせる組版では、いろいろな問題が出てくる。フォントを作成する立場でも苦労しているみたいで、Adobe の山本太郎さんの講演が公開されている¹⁾。べつに行送り方向の文字の位置を揃える問題について

1) <https://youtu.be/5-nfeJERZXU>

は、活字組版時代から意見の相違があった。例えば、「和文に対して、ラテン文字を下げろ」、「下げるとおかしい」、「ラテン文字の文字サイズを大きくした方がよい」、「それはフォントを選ぶ際に注意すればよいことでしょう」、……、といったように、共通の認識に到達することは、ほぼ不可能だったと言ってよい。

縦組になると、問題はさらに複雑になる。そのうえ、電子書籍などでは、読者の側で組方向を選択できるので、横組と縦組の変換というか、両方に対応しないとイケない。正直に言えば、あまり考えたくない。

和文と混植するラテン文字の選択

最初の問題は、混植するラテン文字のフォントや文字サイズをどう選択したらよいかである。原則的なことでは、次のようなことが言えよう。

- 1 文字の画線の太さが一様でない（変化している）明朝体の場合、その線の特徴が似ているラテン文字のローマン体を選ぶ。
- 2 文字の画線の太さも似たものを選ぶ（和文のブロックの濃度とラテン文字のブロックの濃度に大きな違いがないようにする）。
- 3 明朝体の場合、仮名とのバランスを考慮し、その線のカーブが似たものを選ぶ。例えば、ボドニーのように直線的な画線のフォントを選択しない（漢字だけだと似ている感じはあるが）。仮名を重視するのは、明朝体の仮名は漢字の明朝体とは画線の設計が異なり、その意味で仮名は明朝体とはいえないかもしれないが、漢字と合う仮名を作製してきた。そして、明朝体の和文フォントについていえば、その特徴というか雰囲気は仮名にある、という事情による。
- 4 和文とラテン文字との字面の大きさのバランスを考慮し、また、通常は混ぜ組に使用されるラテン文字は小文字が多くなるので、ラテン文字はできるだけ「x-height」の大きなものを選ぶ。もちろん、和文よりラテン文字のサイズを大きくする方法もある（DTPではよく行って

いる）が、機械的な処理を考えれば、同じサイズでよい。

- 5 和文フォントにはプロポーショナルのラテン文字を含んでいるものが多い（以下、付属文字という）。そこで、ラテン文字に、この付属文字を選ぶか、別のラテン文字のフォントを選ぶかが問題になる。和文文字と組み合わせるラテン文字の条件は前述したが、付属文字は、そのことを考慮して設計されていると思われる。その意味では、通常は、この付属書体を選べばよい。もちろん、その付属書体を使用しないで、別のフォントを選ぶことも可能であるが、その選択は、それなりに経験のいることであり、それをデフォルトとする必要はないであろう。

- 6 和文の（ある程度の画線の太い）ゴシック体との混植について、少しだけ補足しておく。和文のゴシック体との混植では、以下の2つの方法がある。

- a ラテン文字のサンセリフと混植する。
- b ラテン文字のローマン体で画線の太いボールドと混植する。

この場合、aは画線のデザインと画線の太さを揃えているのに対し、bは画線の太さだけを揃えている。和文でもゴシック体の漢字とアンチック体（明朝体風の仮名で画線を太くしたフォント）の仮名を組み合わせる例があり、それなりにバランスがとれているので、bの選択もありえるが、通常は、aの方が望ましいといえよう。

ゴシック体の漢字とアンチック体の仮名の組合せは活字組版時代にも行われていた。ただし、その当時は仮名のゴシック体のデザインに優れたものがなかったので、やむなくアンチック体を選んだことによる。今日の漫画の台詞では、積極的にゴシック体の漢字とアンチック体の仮名の組合せが選ばれている。これは漢字と仮名との差異がある程度とることにより、漢字という語句のまとまりをはっきりさせるという効果を考えたものである。

行送り方向の配置位置

次の問題は、行送り方向の位置である。この問題は、ラテン文字列が、大文字だけ、小文字だけ、しかも短字 (a, c, e など) だけと条件が揃っていれば、ある程度の正解はでてくる。あるいは装幀で本のタイトルを処理するように文字の内容が決まっている個別ケースで、時間を掛けることが可能な場合は、たぶん正解は出てくる。しかし、各種の字形が出てきて、しかも機械的な処理をする場合は、簡単ではない。ある程度の線で妥協しないといけない。

横組 (縦組で文字を横に回転した場合を含む) の場合、仮想ボディを基準に考えると、天地左右中央の位置にある和文に対し、短字のラテン文字、特に大文字は和文の下端 (縦組では左端) より、字面が上がって (縦組では右に寄って) 見える。しかし、この位置を下げるとデセンダーがある小文字が行間にはみ出してしまうかもしれない。そこで、活字組版時代は、和文と欧文のボディの位置を揃えるしかないということ処理していた。多少は不満が残るがやむをえないということである。

最近の書籍・雑誌では、行送り方向の文字位置の変更が比較的簡単なので、ラテン文字のペー

スラインを和文文字の外枠の下端か、その近くに設定した例をよく見かける。横組では下端のラインが揃うということはあるが、縦組の場合 (ラテン文字の内容にもよるが)、ラテン文字が左によってバランスを壊した印象を与える。大文字やアラビア数字が主に使用されているのであれば (和文中に使用するアラビア数字も大文字と天地サイズは同じ)、和文の仮想ボディの中心と大文字の中心を揃えるという方法も考えられる。いくつかの例を図1に示しておく。

字詰め方向の配置

フォントの選択にもよるが、ラテン文字の字詰め方向の仮想ボディと字面との空白 (サイドベアリング) は、和文文字より狭いのが一般的である (1字1字の独立性がややある和文文字と主に単語を単位に読んでいくラテン文字との差異による)。そのような和文文字とラテン文字をベタ組で配置すると、和文とラテン文字の字間が詰まった印象を与える。そこで、活字組版時代には、和文とラテン文字の字間として、組版材料の関係もあり四分アキにしていた。今日では、この和文とラテン文字の字間は、必ずしも四分アキにする必要はないが、なんらかのアキを確保するのが望ま

のは IMF の A 国と B 国に a 個と b 個
の caption 配置 page number など
のは IMF の A 国と B 国に a 個と b 個
の caption 配置 page number など
のは IMF の A 国と B 国に a 個と b 個
の caption 配置 page number など
のは IMF の A 国と B 国に a 個と b 個
の caption 配置 page number など
のは IMF の A 国と B 国に a 個と b 個
の caption 配置 page number など

図1 行送り方向の配置位置例

は IMF の A 国と B 国に a 個と b 個
の caption 配置 page number など
は IMF の A 国と B 国に a 個と b 個
の caption 配置 page number など
は IMF の A 国と B 国に a 個と b 個
の caption 配置 page number など
は IMF の A 国と B 国に a 個と b 個
の caption 配置 page number など
は IMF の A 国と B 国に a 個と b 個
の caption 配置 page number など
は IMF の A 国と B 国に a 個と b 個
の caption 配置 page number など

図2 和欧文間のアキの例 (上から、二分、三分、四分、六分、八分、ベタ)

しい。ただし、和文でも仮想ボディに対して字面
が大きな和文フォントがあるので、こうした場合
は、和欧文間のアキはとらない、という処理も考
えられよう。

なお、混植のパターンもラテン文字1字の場合、
単語の場合、複数の単語の場合、文字種もアラビ
ア数字、小文字、大文字といったように各種のパ
ターンがある。当然、その組合わせによって、
和欧文間の理想的なアキは異なる。しかし、一律
の処理を前提にしたときは、個別ケースでは多少
はバランスを欠く配置となるケースも出るが、そ
れはやむを得ないことであろう。いくつかの例を
図2に示しておく。

縦組におけるラテン文字の配置の向き

縦組にラテン文字を配置する場合、向きをどう
するかなど問題が多い。ラテン文字が入る場合は、
できれば横組としたいが、そうもいえない。また、
縦組だけでなく、横組に変換されて表示されるか
もしれないので、その点も考えておく必要がある。

まず、配置する文字の向きである。方法はいく
つかある、

- 1 行中にラテン文字を正常な向きに配置する。
- 2 行中にラテン文字を横転させて配置する。
- 3 図版などのように別の領域をページ内に作成
し、あるいは1ページ全部を使い、そこだけ
は横組として、ラテン文字を正常な向きに配置
する。

行中に挿入する場合、文字は正しい向きに配置
すべきだということは前提である。しかし、縦組
でラテン文字の文章を正常な向きで1字1字配
置しては読めたものではない。これは、前述した
ようにラテン文字は横向きに連続したまとまりと
して読むのが原則であることによる。となれば、
ラテン文字を縦組の行中に配置する場合は、横転
させて配置する、ということが原則になる。実際
にも、通常のプロポーショナルなラテン文字を使
用すると、デフォルトでは横転して配置される。

横転して組まれたラテン文字を校正する場合、

校正刷は90度回転させ、文字を正常な向きにし
て作業すると、きつく注意されることがある。と
いうことは。90度回転させないで、校正するこ
ともあり、横向きにされた文字もけっこう読むこ
とができるということでもある。

ただし、いくつか例外があり、正常な向きに配
置する。以下に例を示す。(いっさいラテン文字
は横転させてしまえ、という考え方もあり、そう
すれば問題は少なくなるが、ここでは採用しな
い。)

まずは、ラテン文字が1字の場合である。ラ
テン文字が連続しないので、正常な向きに配置で
きる。以下の方法がある。

- a 全角のラテン文字を使用する。
- b プロポーショナルなラテン文字を使用し、
書式を設定して正常な向きに配置する。
- c 縦中横機能を利用して、ラテン文字を正常
な向きに配置する。

一般に全角のラテン文字は、プロポーショナル
なラテン文字の字形をそのまま使用しないで、い
くらか字形を広げた字形にすることが多い。プロ
ポーショナルなラテン文字のフォントが付属書体
であれば、書体にもよるが、その字形の差は、よ
く観察しないとわからない程度であろう。したが
って、その差は、通常の読書では気が付かないこ
とが多い。別のフォントを選んだ場合は、フォ
ントにもよるが、差異がある程度出るかもしれない。

ただし、全角のラテン文字を使用する方法では、
縦組を横組に変換する場合に、いくらか問題が出
る。一般には、横組では、すべてプロポーシ
ョナルなラテン文字を使用するのが原則である。それ
により、全ての字形が揃うことになる。1字だけ
の場合は全角の字形を使用するという考え方もあ
るが、これは手動写真植字の作業性を考慮したも
のであり、また、ワープロでも書式の設定を行わ
ないということによるので、あくまで便法と考え
た方がよい。

細かいことになるが、横組で全角のラテン文字
を使用した場合、その後ろに句読点や括弧が配置

トピック

されると、句読点や括弧の前にアキがでる。また、句読点や括弧の前にラテン文字が配置されると、句読点や括弧の前にアキがでる。ラテン文字が句読点や括弧の後ろに配置されると、句読点や括弧の後ろのアキが二分以上に見える。さらに、行頭・行末でもアキがでるケースがある。こうしたことは、できれば避けたい事項である。

ということで、縦・横変換を考えた場合は、プロポーショナルなラテン文字を使用し、なんらかの方法で正常な向きにする、縦組だけである場合は、全角のラテン文字を使用する方法でもよい、ということになる。

次に、ラテン文字が複数の頭字語で、すべて大文字の場合である。これは、ラテン文字を1字1字読むわけではないので、正常な向きでも読みやすさに問題はでない。なお、頭字語は2つに分けられる。1字1字読む場合と、単語のように読む場合である。前者はOECD（経済協力開発機構）、後者はOPAC（オーパック、オパック）のような例である（後者は、言語によっては先頭文字のみ大文字にし、以下は小文字とする表記方法もある）。多くの場合、頭字語は、単語のように読む場合を含め、縦向きにしている。

ただし、頭字語で単語のように読む場合、特に文字数の多いCOMECON（コメコン、経済相互援助会議）などでは、横向きにしてもよいのかもしれない。

なお、頭字語を縦向きに配置した場合、その字間での2行にわたる分割は認められており、ラテン文字に全角字形を使用したときは、一般に分割される。しかし、一体として扱うということで、分割を認めない方法も行われている。

これ以外にいくつかの問題となるケースがある。例を掲げておく。

1 大文字に小文字が混じった頭字語の例 これらも縦向きにしているが、小文字が混じる場合、縦向きにすると字間が不均一になる場合もある、横組にしてもよいのかもしれない。

例 fMRI（機能的磁気共鳴画像法）、BRICs（ブ

リックス）、ECoG（皮質脳波法）
2 数字交じり これらも縦向きにする例が多い。2桁の数字を含む場合は縦中横で処理するのがよいであろう。

例 H5N1（鳥インフルエンザ）、D20 サミット

3 大文字であるが語間を含む例 一般に縦向きにする例が多いが、横向きにしてもよいだろう。なお、縦向きの場合は、語間は全角アキにする方法と二分などと狭める方法とがある。

例 FOOD ACTION NIPPON（自給率を赤める運動）

4 つなぎ符号を使った例 縦組にする例が多いが、横向きにしてもよいだろう。つなぎ符号は、横向きにする場合は二分ダッシュであり、縦向きの場合も二分ダッシュが望ましいが、いろいろなつなぎ符号が使用されている。

例 NDL-OPAC（エヌディエル・オーパック）、CD-ROM、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）

5 ピリオドが混じる 縦向きにする例が多い。問題は省略符のピリオドで、全角のピリオドを使用する例とプロポーショナルなピリオドを使う例がある。どちらもあまりバランスがよいとはいえない。特に全角の場合はバランスが悪い。また、以下の例でいえば、「D.」と「C.」とを縦中横で処理している例もある。これも、あまりバランスがよいとはいえない。いっそ横向きにしてもよいだろう。

例 ワシントン D.C.

6 見慣れた単語 単語の場合は、一般に横転して配置するが、見慣れた単語では縦向きにする方法も行われている。しかし、単語の場合、デセンドーやアセンドーを含む場合など、縦向きにすると字間が乱れるので、横転させた方がよいが、悩ましい問題でもある。

例 Windows Web

なお、縦組でラテン文字を正常な向きにした場合、横組のように和欧文間の四分アキ等はしない。文字の上下と左右では、その考え方が異なってお

①
②

り、左右では狭いが、上下では文字の字形にもよるが、それほど狭くないので、ベタ組でよい。

このように頭字語や、それに類するケースのラテン文字の向きは、簡単ではない。

その他のラテン文字の縦組処理

その他、ラテン文字を縦組に配置する際に問題となる例がある。これらを説明するとけっこう厄介なので、少しだけのコメントに止めておく。問題点を主に示しておく。

- 1 ラテン文字に上付きや下付きの添え字が付く場合 横向きにしないと正確に表現できないだろうが、「CO₂」などは意味をとりやすいというところで新聞などでは正常な向きの配置を見かける。
- 2 単位記号 縦組の場合、数字には漢数字を使用し、単位記号は片仮名で示す例が多いが、縦横変換を考えると、「25 cm」「25 m²」のようにアラビア数字を使用し、多くはプロポーション的なラテン文字の単位記号を使う例もでてくる。単位記号には全角のボディにまとめた文字(例: 25cm, 25㎡)があるので、それを使用することも考えられるが、全部揃っているわけではないし、横組では使用したくない文字である。
- 3 人名の省略符 縦組のときは一般に省略符(ピリオド)は~~つ~~けないで、区切りに中点(中黒)を使うことが多い(例: ドナルド・P・ドーア)。横組では、いくつかの方法があるが、イニシャルの欧字に省略符のピリオド(字幅は約四分)を~~つ~~ける例がある(例: ドナルド P. ドーア)。これを縦組にする場合、どうしたらよいであろうか。いっそ、横組でも縦組に揃えて中点で区切れれば問題を回避できる。
- 4 文字等の並列 以下のような例である。これらは正常な向きにしたいが、無理がある。
 a, b, c, \dots, n $1, 2, 3, \dots, n$

大家さん: いやあ、驚きましたな。日本語の中に欧文や欧字を入れるのって、すさまじくやっ

文字もじ MOJI の世界

村上春樹の“1Q84”は
村上春樹の“1 Q 8 4”は
村上春樹の“1Q84”は
魯迅の“阿 Q 正伝”は
魯迅の“阿Q正伝”は
魯迅の“阿Q正伝”は
魯迅の“阿Q正伝”は
魯迅の“阿 Q 正伝”は
魯迅の“阿Q正伝”は

図3 「Q」の組方例

かいな問題なんです。話を聞いていると、『阿Q正伝』の「Q」と『1Q84』の「Q」でも、違いがあるみたい。最後に、ご隠居さんに、~~それぞれ、縦組と横組で、~~どんな可能性があるか、実例を示していただけたら……[△]

ご隠居さん: なんだい、長々と講義させておいた上に、手仕事まで押しつけようってのかい、やれやれ。(つづく)



* KOBAYASHI Tatsuo
文字情報技術促進協会会長
tlk@kobaysh.com

謝辞: 今号も、W3C JLreq Task

Forceのメンバーである小林敏氏、田嶋淳氏との議論を元に原稿を構成した。さらに、同Task Forceメンバーでもありタイポグラフィ学会長でもあるアドビの山本太郎氏からは関連する講演記録の存在をご教示いただいた。同タスクフォース議長の木田泰夫氏とともに、衷心からの謝意を表す。/ '